

山田光春の前半生(1912~1945)

成瀬美幸

はじめに

やま だ こうしゅん

山田光春は、1912（明治45）年に愛知県小原村（現在の豊田市）に生まれ、1981（昭和56）年に名古屋市で歿した画家、美術教育者である。

画家としては、戦前から戦後にかけて自由美術家協会に出品を続け、1964（昭和39）年に主体美術協会の設立時には創立会員になるなど、生涯にわたり制作を行った。教育者としては、戦前は旧制中学や尋常小学校で、戦後は高校で教師を続け、1958年からは、愛知県立女子大学（現在の愛知県立大学）で務め、その間、図画教育に関する研究会や全国大会の開催にも尽力している。一方、光春の功績として最も知られているのは、瑛九（1911-1960）の研究である。光春と瑛九が出会ったのは、光春が教師として初赴任した宮崎であり、二人ともまだ20歳代前半であった。交友は生涯に渡り、1960年に瑛九が48歳で亡くなったのち、光春は瑛九について精細に調査を重ね、1976年に『瑛九 評伝と作品』を出版した。また、出身地である愛知県小原村の一産業であった和紙を美術工芸の域に高めた功労者、藤井達吉についても、1974年に『藤井達吉の生涯』を出版。二冊の著書は、それぞれの作家の基礎文献となっている。

光春の没後、遺族は光春の遺作を長年にわたり守り、彼の足跡がたどれるよう資料整理を行ってきた。令和5年度に当館ではそのうち紙媒体の資料を複写し、一部は譲り受けてファイル化した。写真資料もデジタル複写を終えており、これらは今後整理する予定である。

画家の生涯をたどるにあたり、これらの資料は大変貴重である。光春の青年期は日中戦争や太平洋戦争と重なっており、戦前戦後で、美術教育と画壇、どちらにも一貫して関わり続けている。それは時勢や制度、こと教育に関しては根本から大転換するなか、けて容易なことではなかっただろう。本稿では、若かりし頃の光春の選択に注目しつつ、終戦までの前半生をたどってみる。

幼少期～小原時代

山田光春は生前、十代までの自らの動向について手記を残していた。それを光春の没後、長男の光一氏が『山田光春 書き下ろし史』と題して書写編集している。この手記について、光一氏は序文で次のように説明している。

父、光春がコクヨの200字原稿用紙の数冊の束に、小原村に生まれ始まった日々の記憶を、「瑛九」「達吉」の著作を書くのと同じ事細かな描写で、書き始めたのはいつのことかわからない。その原稿用紙は、戦後自由美術の時代でその後がないのは、もう書く時間がなかったのか、どこかにまだあるのか¹。

未完ではあるものの、山田光春が自らの子供時代から東京美術学校入学までを詳細に記述した手記はほかにない。幼少期は、この貴重な資料に沿って紹介する。



図1
現在の祝峯寺山門（2023年筆者撮影）

山田光春は1912（明治45）年 3月21日、愛知県小原村三ツ久保の臨済宗妙心寺派・松巖山祝峯寺（図1）に4人兄弟、次男末子として生まれた。光春は本名である。父鐮仙は祝峯寺の7代目住職であった。祝峯寺は国土地理院地図によると標高460m付近の山腹にあり、現在はだるまの祈禱を行う寺として知られている。

小原村は、2005年に豊田市と合併した。近年は秋に四季桜と紅葉の共演が見られる名所・川見四季桜の里に多くの観光客が訪れる。岐阜県との県境の山間にある小原は、80%以上が森林の山村であり、光春は「僕の育った大正期には名古屋に出るのに瑞浪か多治見まで歩いて中央線に乗るか、さもなければ瀬戸まで歩いて瀬戸電を利用するかしなければならなかった。」²と回想している。

光春は、1918（大正7）年に小原第一尋常小学校（現在の豊田市立道慈小学校）に入学した。現在も同校は当時と同じ場所にある。光春は祝峯寺から南西に向かって、いったん山をおりて平坦な道に入り、再び標高400m近くに位置する小学校に登るという、高低差のある往復約8kmの道を通学した。『山田光春 書き下ろし』には、登下校の途中でも野球をしたり、鳥を捕ったり、地蜂を追って蜂の子を獲ったりしたことが事細かに書かれており、当時の小原の子供たちが山を舞台に真剣に遊んでいた様子が生き生きと伝わってくる。一方で、この頃には少年雑誌の挿絵の模写に夢中になるなど絵心が芽生え、近所では「お寺の絵かき少年」として通っていたという。

1924（大正13）年に小原第一尋常小学校を卒業すると、当時の義務教育期間は尋常小学校の6年間であるが、光春はそのまま同じ敷地にある2年制の小原第一高等小学校に進んだ。『山田光春 書き下ろし』では「その頃のぼくの小学校では、尋常科卒業と同時に中等学校に進むなどほとんどなく、そうかといっても女工になったりして働きに出る者も少なく、大部分は高等科に進んだ。」³とある。全国的な尋常小学校卒業者の高等小学校への進学率が、1939（昭和14）年の時点でも 67.5%であった⁴というから、山村である当時の小原村は比較的学問に対して意識の高い地域であったことがうかがえる。

高等小学校卒業後の光春の進路を決めた方法には、エピソードが残されている。高等小学校2年の正月、家族が集まった折りに光春の将来について話し合いが行われた。しかし結論が出ずくじ引きとなったという。二種類のくじが用意され、一種類目には就くべき職業名、二種類目には行き先が書かれていた。くじの中には、親戚が営んでいた菓子屋や人形屋などの商売や、両親が希望した職業が含まれていたが、そこから光春が引いたくじは、職業「教師」、行き先「師範学校」だったという。『山田光春 書き下ろし』で光春は「冗談まじりにやったこのくじ引きが結果としてはぼくの運命を支配することになった。奇妙なことではあるが、そこには何ものか大きなものの意思が働いていたように思われる。」⁵と当時を振り返っている。

お絵かき少年だった光春は、この頃画家になる将来を夢見ていなかったのだろうか。頭によぎったとしても、それを職業にしたいとは口に出せずにいたのかもしれない。だが、このとき決まった進路が、その後の山田光春の人生の大きな本流へと誘っていく。

光春は目下の目標が定まると1月から受験勉強を始め、師範学校の入学試験に合格する。光春の記憶によると4、5倍の競争率だった⁶という。14歳になった光春は1926（大正15）年4月、進学のため小原村を離れた。

愛知県第一師範学校時代

山田光春が入学したのは、名古屋市にあった愛知県第一師範学校（現在の愛知教育大学）である。師範学校は小学校の教員養成を目的とした5年制の教育機関で、高等小学校を卒業していることが受験条件であった。師範学校は、卒業後も義務を課されるものの授業料は免除、基本的に全寮制で、山寺の次男である光春が進学を志すとなると、師範学校以外の選択肢はそう多くはなかっただろう。

小原の小学校では図画といえばお手本を模写する臨画ばかりで、写生は数回程度の経験しかなかった光春は、師範学校の図画の授業ではじめて鉛筆による静物デッサンを知り、形の描写や光、陰影について学んだという。他にも図画の授業では水彩画や図案、定規・コンパス・分度器などを用いて図形を描く用器画に多く時間が割かれていた。当時、愛知県第一師範学校の図画教師は東京高等師範学校図画手工科出身の原田隆諦（1885-1944?）が務めていた。原田は、洋画を小山正太郎、中澤弘光、岡田三郎助に、日本画を川合玉堂に学んだ、画家としても文展入選を果たす実力者でありながら、生涯美術教育に尽力した人物であった。光春在学中の1928（昭和3）年には、原田は愛知県図画教育研究会の総務主任としてその創立総会を愛知県第一師範学校で開くなど、戦前の愛知県における美術教育改革の推進役も担っている。このときの教師たちの研究会は、当時生徒だった光春には直接関係はなかっただろうが、のちに関わることになっていく。

原田隆諦に見込まれた光春は、2年生の頃から原田の自宅に通い、描いた作品について個人指導を受けるようになった。戸外の写生にも出かけ、3年生の春に、水彩画コンクールで入賞した際に賞品として油絵具一式を贈られると、油絵も描きはじめる。農業の教師からはミレーの《晩鐘》の模写（図2）を頼まれたというから、絵かきとしての光春は校内でかなり知られた存在だったようである。

光春が師範学校に在学していた頃の名古屋では、1928（昭和3）年に鶴舞公園で御大典奉祝名古屋博覧会が開かれた。昭和4（1929）年から名古屋市民美術展が始まり、愛知社やサンサシオンなど愛知に縁ある美術団体の展覧会も立て続けに開催されるようになっていた。美術雑誌によって展覧会や評論など情報も得やすくなり、小原にいた頃に比べると光春の美術に対する視界も広がった。そのうえで光春は「当時のぼくには二科や独立、そして春陽会の作品などよりも帝展の作品の方がすばらしいものに見えた。そこには原田先生の影響もあったが、ぼくの精神がそうした状況にあったのである。」と回顧している。



図2
ミレー《晩鐘》の自作の模写と光春
1928年頃

光春は3年生、遅くとも4年生で東京美術学校（現在の東京芸術大学）に進学するための勉強を始めたと思われる。光春の先輩にも東京美術学校の受験勉強をしていた者がいたというから、原田隆諦は、資質を認めた生徒には美術学校への進学のサポートをしていたようだ。一方で原田が東京高等師範学校出身ということもあり、光春には同校への受験も勧めたようである。授業料免除の師範学校の生徒がさらに進学するとすると、家族の同意や金銭の工面など悩ましい問題もあった。少なくとも浪人は回避したいところであったろう。原田の口利きで、当時第八高校の講師を勤めていた洋画家田辺至にもデッサンを見てもらっていたというから、受験の3年前から周到かつ真剣に、生徒も教師も受験に備えたことがうかがえる。

師範学校での後半期を東京美術学校の受験勉強に費やしたにも関わらず、受験前に光春は家族に相談しなかった。5年生の冬休みに帰省した際に母親にのみ、試験は受けるだけと告げ、1931（昭和6）年3月、東京美術学校受験のため上京した。

東京美術学校の当時の入学試験は、西洋画科は石膏デッサンの実技のみであったのに対し、光春が受験した図画師範科は、石膏デッサン、用器画、図案といった実技と、国語、英語などの学科があった。光春が受験した1931年度は、入学志願者数が最も多かったのが西洋画科で421人、うち合格者が45人であり、次いで入学志願者数が多かったのが図画師範科で324人、うち合格者は25人であった。この年最も合格倍率が高かったのは図画師範科で12.96倍であった⁸が、光春は見事に合格する。

合格が決まって、初めて東京美術学校進学を家族に報告した光春だが、その後無事に両親の理解を得ることができた。親戚から学費を借りる目途もたったことで、進学を果たしたのだった。

東京美術学校時代

愛知県第一師範学校を卒業した光春は、1931（昭和6）年4月、東京美術学校図画師範科に入学した。『山田光春 書き下ろし』には、原田隆諦の引率で、光春と、同じく東京美術学校図画師範科に合格した原田の息子の3人で上京して美術界や美術教育の大御所宅を訪問したことや、東京にいた光春の姉一家についての記述はあるが、東京美術学校での学生生活についてはさわりのところまで、本文もそこで終わっている。図画師範科は3年制で、師範学校、中学校、高等女学校の図画科教員の資格を得ることができた。1923（大正12）年に改正された授業科目数や授業数（図3）は、図画師範科は西洋画科と比較すると明らかに多く、学科の比率が高い。選択科目もなく、美術教師の育成に特化した授業内容となっている。ただし1928（昭和3）年の陸軍による学校教練修了者検定規定の公布後は軍事教練も組み込まれたため、光春が受けた実際の授業数は図3と少し異なる。

この頃の光春の作品は、『ギターの少女』（図4）などを見る限り、新しい美術の動向を

図3 1週あたりのカリキュラム及び授業時数					
科目	1	2	3	4	5
図画	1	1	1	1	1
音楽	1	1	1	1	1
英語	1	1	1	1	1
国語	1	1	1	1	1
算数	1	1	1	1	1
理科	1	1	1	1	1
社会	1	1	1	1	1
体育	1	1	1	1	1
衛生	1	1	1	1	1
労働	1	1	1	1	1
その他	1	1	1	1	1

図3
1週あたりのカリキュラム及び授業時数
1923（大正12）年改正
（『東京美術学校の歴史』1987年より引用）



図4
『ギターの少女』1931年

さほど意識しているようには見えない。図画教師を目指す者として技術の修得と向上を優先した結果だろう。

1932（昭和7）年、和田英作が東京美術学校校長に就任すると、様々な学内改革がおこなわれた。1933（昭和8）年には図画師範科教官の入れ替えがあり、授業内容も教師育成からより技術の向上に重きがおかれるようになったが、最終学年の3年生となっていた光春がどこまで影響を受けたかは不明である。

1934（昭和9）年3月、東京美術学校を卒業する。卒業写真の右上の枠内に収まっているのが光春である（図5）。4月からの兵役のため、卒業式より一足早く東京を去っていたのかもしれない。



図5
東京美術学校卒業写真 1934年

宮崎での出会い

1934（昭和9）年4月から8月まで、光春は短期現役兵として岐阜の歩兵連隊に服役する。短期現役兵とは、1927（昭和2）年公布の兵役法において師範学校卒業者に課せられた義務であった。満25歳までに服役しなければならず、服役期間は5ヵ月、その間に伍長まで昇進した。現役兵の服役期間2年と比べると、公立小学校教員になる特典ととれる優遇措置である。

兵役後、9月に光春が教師として初めて赴任したのは、宮崎県妻町（現在の西都市）の宮崎県立妻中学校（現在の宮崎県立妻高校）であった。東京美術学校の恩師の勧めによるという。妻町では、妻尋常高等小学校、妻高等女学校の嘱託も兼務した。後年、光春の著書『瑛九 評伝と作品』の序章の冒頭は、宮崎県、そして妻町に光春が初めて着いたときの景色や印象から始まっている。そして宮崎行きを決めたときの心境を「一人の知人も友人もない日本のはてのようなそうした所へ行こうと心に決めるには、多少の好奇心と冒険心とがはたらかなかったわけではないが、さりとて、別に期待するところがあったわけではなく、それを自分に課せられた運命でもあるかのごとくに甘受した⁹⁾」と回想している。

10月、宮崎美術協会の創立総会に参加する。この年、神武天皇東遷2600年の奉祝事業の一環として県内の図画教師が中心となって発足した団体であり、赴任してまもない新人教師の山田も呼び出されたという。その会場で出会ったのが杉田秀夫、のちの瑛九（1911-1960）であった。

今では戦前戦後にかけて絵画、写真、版画の分野で独自の理論に基づいた前衛的な作品で知られている瑛九だが、当時は上京しては故郷の宮崎に戻ることを繰り返していた。中学校を中退し、十代の時から美術雑誌や写真雑誌等に展評や美術評論を数多く投稿していた瑛九と、東京美術学校を卒業したばかりでひとつ年下の光春は意気投合する。東京から遠く離れた場所に赴いたのに、ピカソやシュルレアリスムについて語りあえる人物と出会うとは、光春にとっては思いもよらなかったようだ。光春は毎週、

学校勤めが終わる土曜日午後に瑛九の家に泊まっては、美術や音楽、文学といった様々な芸術について語り合い、酒を酌み交わし、外出し、日曜日の夜に帰宅するようになった。早くから学校という枠外にいた瑛九がはなつ熱量は、師範学校と東京美術学校を浪人せず入学し卒業した光春に大きな刺激を与えたに違いない。二人で写生旅行に出かけたり、瑛九や他の仲間とふるさと社を結成して展覧会を開催したりと、宮崎での日々は光春にかけがえのない経験や出会いをもたらしたといえる。

光春は妻中学校に1年半勤務し、1936（昭和11）年5月、郷里である愛知県刈谷高等女学校（現在の愛知県立刈谷北高校）に転任する。『瑛九 評伝と作品』にも記されているように、その後も瑛九は、東京や宮崎、関西に行き来する際には愛知の光春の下宿に立ち寄り、時には居候し、手紙を交わし、二人の交友は、瑛九が48歳で亡くなるまで続いた。

中央画壇への登場

光春が宮崎県から愛知県刈谷高等女学校に転任した1936年6月、名古屋では師範学校恩師の原田隆諦が総務主任となり、愛知県図画教育研究会と愛知県教育会主催で全国図画教育大会が名古屋市公会堂で開催された。このとき光春はたいした手伝いはできなかった¹⁰と回想しているが、原田にとっては愛知で図画教育に携わる教え子がまた一人増えたと心強いものがあっただろう。

翌1937（昭和12）年7月、光春は第1回自由美術家協会展にガラス絵を出品する。中央画壇への出品は、光春にとって初めてのことであった。さかのぼって同年2月に結成された自由美術家協会は、長谷川三郎を中心に理論的な趣旨を掲げ、油彩以外の素材の作品も自由に出品可能な団体だった。自由美術家協会の結成に参加していた瑛九は、光春に長谷川三郎と久保貞次郎を紹介し、ガラス絵の作品を見てもらうことを勧めている。それにしがたい光春も1937年3月に二人に会い感想や意見を受けたことで、すでに結成が決まっていた自由美術家協会への出品を決めた。すると瑛九は光春が無事に画家として船出ができるよう、制作から出品までの細かく助言を書いた書簡を送っている。瑛九はというと、体調の不安などを理由に宮崎から上京せず、自分の出品作は光春の家に作品を送ったため、光春が自作とともに東京に運んだ¹¹。光春は第1回自由美術家協会展にガラス絵《門》（図6）で自由美術家協会賞を受賞。会友に推挙され、その後も自由美術家協会への出品を続けたのである。

この時出品した光春のガラス絵は、東京美術学校時代の作風とは明らかに異なり、シュルレアリスムや抽象的な表現を意識したものであった。光春のガラス絵については、森本陽香氏の論考¹²に詳しい。宮崎県で過ごした1年半の間は週末毎に瑛九と語り合った光春が、シュルレアリスムを含む新しい芸術運動に魅かれるようになったのは自然の成り行きだろうし、瑛九が1936年に発表したフォト・デッサンについても、そこ



図6
《門》 1937年 愛知県美術館蔵

に至るまでの経緯や効果を光春は理解していた。森本氏は「表から見える最終的な画面が完全に予測通りになるとは限らない¹³」ガラス絵とシュルレアリスムの親和性を指摘している。使い慣れた油絵具やカンヴァス、習得した技法からは生み出せない、より偶然が伴う表現方法を求めて、写真学校で学んだことがある瑛九は扱いなれた印画紙を使ったが、光春はより身近で手に入りやすい素材の板ガラスを選んだとも考えられる。自由美術家協会賞を受賞したことで、ガラス絵の可能性を確信した光春は、その後もガラス絵の制作を油絵と並行して晩年まで続けた。

第1回自由美術家協会展出品から4か月後の11月、光春は鳴海町鳴海尋常高等小学校（現在の名古屋市立鳴海小学校）に赴任する。これは、光春のような師範学校の公費卒業生には、1907（明治40）年公布の師範学校規程によって、卒業した道府県の小学校教員に満28歳までに3年間従事する義務が課せられており、それを果たす必要があったためである。光春は、刈谷でも女学校と同時期に刈谷町小高原尋常小学校（現在の刈谷市立小高原小学校）で授業を受け持っていたが、ここではじめて小学校の専任教員となった。

筆者は山田光春の略歴を最初に読んだとき、時代と年齢を鑑みると、出兵経験があってもおかしくないと考えていた。実際、もし光春が小学校勤務の義務を果たさなかった場合は、短期現役兵の特典はなくなり、現役兵として再入営する義務が生じていたのである。光春が鳴海尋常高等小学校に移る直前の1937（昭和12）年7月には、蘆溝橋事件に端を発した日中戦争が開戦している。1939（昭和14）年の兵役法改正で短期現役兵制は廃止となったものの、光春は終戦まで出兵することはなかった。入営となれば、当時の彼の年齢を考えると戦地にも赴いていた可能性があり、1937年時点での短期現役兵の資格の有無で、その後の光春の人生は大きく変わっていただろう。

鳴海尋常高等小学校に赴任中の1939（昭和14）年には、県内の図画手工教育を対象とした研究会である愛知県図画手工指導会の研究発表校に同校が指定された。光春も尽力したこの会は、百数十名もの図画教育者が参会し好評裡に終わった¹⁴が、その後、終戦まで県下で同様の研究会が開催されることはなかった。

終戦まで

小学校勤務の義務を果たした光春は1940（昭和15）年、愛知県小牧中学校（現在の愛知県立小牧高校）に赴任し、1942（昭和17）年には愛知県熱田中学校（現在の愛知県立瑞陵高校）に転任する。すでに1938（昭和13）年6月の文部省通牒で、中学校以上の生徒には年間5日程度の勤労奉仕が義務づけられていた。1941（昭和16）年の太平洋戦争開戦後は、1943（昭和18）年6月の学徒戦時動員体制確立要綱、続く翌年の緊急学徒勤労動員方策要綱によって、中学校以上の生徒全員の学徒勤労動員が通年実施となる。光春は熱田中学校では引率教師として、担任の生徒たちとともに鐘淵工



図7
《レッスン》1943年

業熱田工場¹⁵に勤務した。1941（昭和16）年に結婚していた光春は、妻子を郊外に疎開させ、自身は工場の寮で寝泊まりした。

自由美術家協会は戦時中、「自由」という名称が忌避され、1940年から美術創作家協会に改称していた。光春は1943年まで同会に出品を続けるが、この頃の制作年代がわかる油彩画は、具象的な画風に落ち着いている（図7）。1944年には陸軍省情報局による美術展覧会取扱要綱により、すべての公募展が中止となり、作品を発表する機会はなくなった。

1945年（昭和20）年に、光春が工場で空襲にあった際には、瑛九から5月27日付で「はがき有難う。新聞でみて心配してゐた。焼だされても君が元気なのがなによりだ。」¹⁶と、避難先の光春あてに見舞いの葉書が届いている。光春から先に無事の連絡を送ったのだろう。その後職場は熱田区の名古屋陸軍造兵廠に移り、8月に終戦を迎えたのだった。

おわりに

あらためて山田光春の前半生を俯瞰すると、小原という山村からおりてきた一人の少年の行く道が、制約もあるなか様々な出会いによって彩られていたことに驚く。人や物事に誠実に向き合う人柄も垣間見え、それが光春に縁をもたらしたのだろう。

終戦の年、光春はまだ30才代前半であった。その後は愛知県から離れることなく、美術界や教育現場で、時勢の転換で直面した課題に取り組むこととなる。戦後から晩年にかけての彼の活動については、また機会を設けてまとめるが、画家としても、教育者としても、その後に成したことへの布石はすでにうたれていたとみることができる。

末尾になりますが、山田光一氏が長年収集・整理された数多くの貴重な資料がなければ、本稿をまとめることはできませんでした。ここに深く御礼申し上げます。

註

¹ 『山田光春 書き下ろし』は、山田光春直筆の未発表原稿を、長男光一氏が2015年に書写編集しテキスト化したもの。本論ではテキストの方を参照した。次に光一氏による序文を全文掲載する。

「父、光春がコクヨの200字原稿用紙の数冊の束に、小原村に生まれ始まった日々の記憶を、「瑛九」「達吉」の著作を書くのと同じ事細かな描写で、書き始めたのはいつのことかわからない。その原稿用紙は、戦後自由美術の時代でその後がないのは、もう書く時間がなかったのか、どこかにまだあるのか。

山奥の村から、一日がかりで名古屋に出、それでは足りず東京まで行ってしまう。戦争が始まる時代、次ははるか南、

宮崎に飛んだと思えば2年もたたずに名古屋に戻る。

父・山田光春は教師であり、美術家であり、作家であり、家庭人でもあり、そして生きゆく道筋で多くの人に恵まれた人であった、と今感じることができるのは、私にとって素晴らしいことだった。

父の日々を追うことが出来た「もの」「こと」「人」を父が残してくれたことに、感謝。」

² 前掲出（註1）

³ 前掲出（註1）

⁴ 都筑学「今日の学校教育制度と人間観・発達観」『心理科学』第34巻第1号、2013年、2頁参照。

⁵ 前掲出（註1）。

⁶ 前掲出（註1）。

⁷ 前掲出（註1）。

⁸ 附表⑨生徒『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第3巻、ぎょうせい、1997年、1151頁参照。1931（昭和6）年度で最も合格倍率が高かったのは図画師範科12.96倍、次いで西洋画科9.35倍であった。

⁹ 山田光春『瑛九 評伝と作品』青龍洞、1976年、24頁。

¹⁰ 「美術教育50年」『愛知県立大学 児童教育学科論集』第10号、1977年、8頁参照。

¹¹ 前掲出（註9）、160-161頁参照。

¹² 森本陽香「山田光春のガラス絵 1930年代のシュルレアリスム受容の一側面」『名古屋市美術館研究紀要』第17巻、2023年

¹³ 前掲出（註12）、7頁。

¹⁴ 前掲出（註10）、9頁参照。

¹⁵ 光春は『瑛九 評伝と作品』や「美術教育50年」などでは学徒動員による勤務先をベニヤ工場、と語り、自身もその工場の寮に入ったことを明かしている。1945年5月11日書簡（「瑛九から山田光春への書簡 1938-1955年」『東京国立近代美術館研究紀要』24号、2020年、40頁）には、あて先が鐘淵工業熱田工場となっている。鐘淵工業は紡績業を営んでいたが、1943年の戦力増強企業整備要項によって、各地の自社工場を重工業関連企業に譲渡や貸与などを行っており、名古屋（熱田）工場も合板工場に転用していた。（鄭安基「戦時期「鐘紡グループ」の変容と鐘紡工業の設立」『経営史学』第32巻第3号、経営学会、1997年参照）

¹⁶ 大谷省吾「瑛九から山田光春への書簡 1938-1955年」『東京国立近代美術館研究紀要』24号、2020年、41頁。